

特集 社会と共に生きる酪農を目指して

2

酪農を通じて、持続可能な社会に貢献！

地場産飼料の生産で田園の環境を維持し、足腰の強い酪農を

千葉県 (有)いすみ高秀牧場

地域の稲作農家と連携し、主食用米、飼料用米に牧場の液肥、堆肥を活用。

循環型農業で地域の水田を活かし、地場産飼料の使用率85%を実現しています。

北海道とカナダで酪農を学び 兄から牧場を引き継ぐ

房総半島東部に位置する千葉県いすみ市。太平洋に面した地域での沿岸漁業、内陸での稲作や果樹栽培などにより豊富な農水産物に恵まれた地域で、近年は学校給食で使用する米をすべて有機米とすることを実現し、注目されています。

この、いすみ市の小高い丘陵地に位置する、いすみ高秀牧場は、現社長である高橋憲二さんの父が1984年に設立。父は八千代市で牧場を経営していましたが、酪農の道に進むことを希望した憲二さんのために牧場用地を購入。最初の4年間は、後に父の牧場を引き継いだお兄さんが経営することになりました。

その間、憲二さんは北海道の酪農学園大学に進学し、2年生のときに、カナダへ酪農研修へ。研修中に、奥さまの奈緒美さんと知り合い、帰国後の1988年に結婚し、二人で牧場を引き継ぎました。その後、1990年には牧場を法人化し、有限会社いすみ高秀牧場の代表取締役となりました。

循環型農業の核として 地域の耕畜連携の中心に

就農後、憲二さんは地域の酪農家5戸と共同で、牛の能力改良や飼料調達、糞尿・堆肥処理などに取り組みグループを結成。

循環型農業の核となる酪農の特質を活かし、地域連携の中心となっていきました。

まずは、地域の稲作農家に牧場の牛の尿から生産した液肥を提供することで、化学肥料の使用量を減らすとともに食味の向上を実現。そのお米は、「万喜米」の名でブランド化され、販売価格も上がり、稲作農家からの信頼を得て耕畜連携が始まりました。

さらに「世界の異常気象や、投機対象としての穀物相場に価格を左右される輸入飼料に依存していると、酪農経営が不安定になる」との危機感から、自給飼料への取り組みも開始。稲作農家に、主食用米の転作として飼料用米、飼料用稲などの栽培を呼びかけます。農地が放棄されず有効に活用・維持され、地域の営農環境の持続につながりました。

「チーズ工房」を立ち上げ 「ミルク工房」も開設

2012年には、牧場内にチーズ工房をオープンし、製造・販売も行う6次産業化をスタートしました。

チーズという商品を通して消費者と直接交流し、牧場を知ってもらうことで付加価値を高め、優秀な人材を確保するという当初の目標通り、チーズ職人を目指す若者が応募してきて、数年のうちに日本や世界のチーズコンクールで受賞するチーズを作り出すことができました。

も行っていましたが、牛舎の仕事との両立は難しく、管理が行き届かずに生乳の生産量を落としてしまいました。そこで、カナダで就職していた娘の温香さんに、帰って来て仕事を手伝ってもらうことに。心強い援軍となりました。

また、2016年には、温香さんを経営者にミルク工房も開設。いすみ高秀牧場の生乳で作るジェラートやチーズの販売に加え、飲食スペースを設けて、チーズ工房のチーズを使ったピザなどを提供しています。

チーズ工房は現在2代目のチーズ職人に引き継がれていますが、初代のチーズ職人は独立して、いすみ市内に工房を構えています。

いすみ市は現在、市内に5軒のチーズ工房が集まった「チーズの町」として、質の高い地場産乳製品の魅力を打ち出していますが、そこにも、いすみ高秀牧場は貢献しているのです。

父同様に息子も 北海道、カナダで学び、牧場へ

現在、憲二さんは牧場の仕事を息子の大地さんに任せ、自分は地域の農業経営グループや生産者団体の仕事など、酪農により大きく関わる仕事に取り組みんでいます。

いすみ高秀牧場の仕事の中核を担う大地さんは、「子どもの頃から、口では継ぐ



上: 牧場主の高橋憲二さん、奈緒美さんご夫妻(右側お二人)と、息子の大地さん、娘の温香さん。
中下: 丘の上にある、いすみ高秀牧場。牧場内のミルク工房のテラスからは、育成牛の牛舎と放牧地が見渡せます。搾乳牛の牛舎の奥には堆肥舎と飼料倉庫が。



● いすみ高秀牧場：千葉県いすみ市





ミルク工房では、いすみ高秀牧場の生乳や地元の農産物などから作るジェラートや、スイーツ、チーズ工房のチーズを使ったピザなどが楽しめます。



温香さん(右から2人目)とミルク工房のスタッフの皆さん。



牧場内のミルク工房(左)とチーズ工房。チーズ工房で作られたチーズは、ミルク工房で販売されるほか、ネットショップでも購入できます。(いすみ高秀牧場ミルク工房の情報は18ページ「ミルククラブセレクション」をご覧ください)



「稲作を中心にして、日本の田園風景を維持しながら、輸入飼料に依存しない足腰の強い酪農を行っていく。それを『里山酪農』と名付けて、『里山牛乳』というブランドをつくりたい。牛乳を1リットル買うと、その価格のうちの1円とか2円とかが



※原料の調達から製造・販売・使用・リサイクルまでは廃棄まで、その商品のライフサイクル全体で排出される温室効果ガスの総量をCO₂に換算して商品やサービスにわかりやすく表示すること。

上:大地さん(一番右)と牧場スタッフの皆さん。左から加村莉香子さん、石渡康裕さん、中村姫花さん。
下:いすみ高秀牧場の現社長の憲二さんと、次期社長の大地さん。自社のみならず地域の、そして日本の酪農の未来を考えています。



搾乳前に、牛の乳頭の洗浄作業中の加村莉香子さん。従来は手作業で洗浄液をつけタオルで拭く作業でしたが、自動で洗浄する装置の導入で作業効率がアップ。



搾乳中の大地さん。いすみ高秀牧場では、朝と夕の2回搾乳をしています。



皆川侑平さんは千葉県内の酪農家の後継者。「自分が人工授精して子牛が生まれたときが一番うれしいです」といい、いすみ高秀牧場で実践経験を積み重ねています。



2カ月前から週に4~5日牧場に来ている中村姫花さん。早くも慣れた手つきで、次々と牧草を与えています。



狭い牛舎内を巧みにフォークリフトを操り、コーンや牧草・飼料用米等運び、混合飼料を作っている石渡康裕さん。

と言っていました。野球ばかりしていましたが、「酪農学園大学に行くと、回りの仲間や先生、研修先の牧場など、多くの人たちと話をし、さまざま酪農を見ていくなかで、自分も酪農をしていきたいという意志が明確になりました」と言います。

特にお世話になったのは、憲二さんが初めて牛を購入した頃からつながりのあった北海道豊富町の佐藤牧場です。

「とにかく牛がきれいで、牛の共進会でも常に好成績を挙げている牧場です。何もわからない頃から研修で受け入れてもらいました。作業一つ一つについて、このような理由で、こういうふうに行うという合理的な説明があり、作業の意味がよく理解できて、とてもありがたかったです」と大地さん。

酪農学園大学卒業後、憲二さんと同様に、大地さんもカナダへ。1年あまりの研修を経て、2018年に帰国し、いすみ高秀牧場に入りました。

「最初の頃は従業員のような気分の仕事をしていました」と言いますが、2年半ほどして牧場を任せられるようになり、自分で考えて動くようになっていったそうです。

「当時は繁殖の成績が悪かったのですが、まずそれを改善したいと思いました。発情を確実に発見できるように観察の回数を増やしたのですが、それだけでも少しずつ改善していくんですよ」と手応えを感じているようです。

ます。今までは、飼料作物の収穫までしてもらっていましたが、今後はできなくなるかもしれない。とはいえ、酪農家自身が飼料まで担うとなると、負担が大きすぎる。その思いから、飼料作りのためのコントラクター(請負組織)やTMRセンター(混合飼料の供給組織)の法人設立も計画中です。

また、憲二さんは2020年、所属する千葉県酪農農業協同組合の組合長に就任し、今後10年間のビジョンを打ち出しました。それは、「酪農協でありながら、米作りも積極的に行う」、名付けて「里山プロジェクト」です。

稲作を中心に地場産飼料で足腰の強い酪農を

「経営も自分で数字を見るようになると、責任者としての自覚が生まれます」と頼もしく語り、今後さらなる規模拡大を目指しているとのこと。

「10年計画で2000~3000頭のフリーストール牛舎の建設を考えています。搾乳ロボットも導入し、できるだけ自動化して省力化を図りたい。そして週休二日制の導入と福利厚生充実も図り、若い人たちがどんどん働いてくれるようにしたいんです」と大地さん。

人材育成は、父子の共通したビジョンで、「スタッフにも、うちで3年から5年働いたら新規就農しなさい」と言っているんですよ」と憲二さん。

大地さんも「うちの牧場をステップにして自分で牧場を始めたい。酪農家の仲間が増えていくと、うれしいですよ」と、自社牧場の発展だけでなく、酪農という営み全体が今後も続くよう、その持続可能性を常に考えています。

耕種農家との連携に長く取り組んできて、地域の農地で生産される飼料用米や稲WCS(発酵粗飼料)、牧草などを高度に活用し、現在、地場産飼料の使用率85%を実現している、いすみ高秀牧場ですが、憲二さんは今後に危機感をもっています。

「飼料用稲や飼料用米を栽培してもらっている稲作農家も高齢化してきてい

『里山基金』に入るようにして、圃場の整備や維持管理のために使っていく。消費者の皆さんも、きちんと考えて牛乳を買うことで、自らも関わっているという思いを持ってほしいのです」と言う憲二さん。

「欧米などでは、農産物にも『カーボンフットプリント』*が導入され、CO₂排出の少ないものが選択できるようにになっています。輸入飼料に比べて、地場産の飼料を使うことは輸送燃料が圧倒的に少ない。そういう点からも、自分の国の農業や、もっと大きくは地球環境のことを考えた消費行動を起こしてほしい。酪農家は酪農家で努力していきますし、消費者は消費者の立場で、できることをしていくことが必要ではないでしょうか」と語ってくれました。